

2020年
12月4日
金曜日

井口 泰 教授（労働経済学）

コロナ危機のアドベント

申命記第32章52節「あなたは、わたくしがイスラエルの子らに与えようとしている地を目の前に見るが、その地へ入っていくことはできない。」（新改訳版）

クリスマスまでの4週間たらずとなりました。今年は、世界中で多くの人たちが、感染拡大と経済的困難のなかにあります。悲惨な年は、クリスマスが来ないなどということはありません。実は、古代教会では、「アドベント」（クリスマス前の4週間）は、悔い改めの期間で、喜びの季節ではなかったと考えられます。

中世後期から、欧州の諸都市では、アドベントにクリスマス・マーケットが開かれるようになりました。そのシンボルの一つである菓子（レープクーヘン）は、子どもや高齢者など、栄養に欠け心身の弱い人たちに配布されたのです。そもそも、このお菓子には不安や痛みをや

わらげ、心身の活力を回復する効能のあるハーブなど多様な成分が含まれます。残念ですが、2020年のクリスマス・マーケットのほとんどは、中止に追い込まれました。

クリスマス前の「アドベント」の季節に、申命記（「モーセ五書」の第3番目）の、この下りが読まれるのは、なぜかわかりますか。

400年以上もエジプトで奴隷の身であったイスラエルの民を、エジプトのファラオから救い出したのは、当時80歳に達していたモーセと、その兄のアロンでした。二人の対照的な姿が目につかびます。二人は、微妙な組み合わせでした。

兄アロンは、司祭で、正装し着飾り、弁舌が巧みでした。しかし、時に、人々の不満が渦巻き、ある時は熱狂に満ちる見える世界を治めねばなりません。弟モーセは、預言者で、素朴・質素な身なりで弁舌に劣り、アロンの助けを必要としつつ、神の

ことばが示す見えない世界を取り次ぎました。二人の関係は、ある時は補完し、他の時は緊張に満ちていました。

モーセが、シナイの山に登り、不従順な民に対し、神の契約の板を持ち帰ります。ところが、モーセ不在の間、不安に捕らわれた民は、金を集めて子牛の像をつくり、拜むようになり、厳しい荒野での40年が、いかに苦しく、困難だったか想像を絶するものがあります。

人々は、見えない神の働きなど待つことができませぬ。アロンは、人々を抑えられませぬ。モーセは、自らの民が、厳しく裁かれ罰せられないよう祈らねばなりません。この間、イスラエルの人々の世代交代が進みます。アロンの死後、モーセは、カナンの地を臨むネボ山に登り、約束の地を見渡しますが、その地にはいれずに死ぬと告げられます。彼は、既に120歳でした。

目に見える現実、特に経済的な充足なしに、人々が苦難を長く耐えることが困難なことは、コロナ危機の現代でも変わりません。私たちは弱すぎ、不安と恐れにとりつかれてしまします。しかし、苦難のなかで生きるために、目に見えない未来への希望が必要です。

アロンが、目に見える形で民に應える存在とすれば、モーセは、目に見えない希望を指し示し、弱り悲しむ人々を支え、民が約束の地にはいる奇跡が起きたのです。

私たちの計画や思いを超えたところで、新たな世代が新たな役割を担い、新しい世界をもたらすことを期待し、勇気を出しましょう。「イエス様、来てください」とは、そういう祈りに他なりません。コロナ危機という苦難の2020年にこそ、私たちは、真のクリスマスの意味を知ることができたのかもしれない。